

Injury Alert (傷害速報)類似事例

医薬品（アレルギー性疾患治療薬）の誤飲による中毒
 (No. 67 医薬品の誤飲による中毒の類似事例3)

事例	年齢：1歳8か月 性別：男児 体重：13.6kg 身長：84.2cm	
傷害の種類	薬物誤飲	
原因対象物	レボセチリジン塩酸塩シロップ（持続性選択H1受容体拮抗・アレルギー性疾患治療薬） 容器：計量カップ付きノズル式投薬瓶	
臨床診断名	急性薬物中毒	
医療費	入院費(計4日間:食費抜き)193,720円	
発生状況	発生場所	自宅リビング
	周囲の人・状況	本児はリビングに、母はキッチンにいた。父と兄（6歳）は入浴中、姉（4歳）は寝室で入眠中であった。
	発生年月日・時刻	2018年5月X日（日）午後7時30分
	発生時の詳しい様子 と経緯	<p>傷害発生前日、近医でレボセチリジン塩酸塩シロップ 35mL（5mL分2、7日分）を処方されていた。シロップは計量カップ付きノズル式投薬瓶（図1）の中に入れて処方された。</p> <p>傷害発生当日の午後7時30分頃、母はシロップ 2.5mL を付属の計量カップで本児に内服させた後、シロップの入った投薬瓶をリビングのダイニングテーブル(高さ約80cm)の上において、計量カップをキッチンで洗っていた。本児が突然咳込んでいる音が聞こえたため、リビングに戻ったら、本児が投薬瓶を手に持って口につけていた（図2）。母はすぐに投薬瓶を取り上げて、内容量を確認したところ、元々25mLあったシロップが5mLまで減少していた。すぐに小児救急電話相談（#8000）に電話したところ、救急受診を勧められた。家を出る準備をしていたところ、本児の視線が合わず、ふらつき始めたため、午後8時5分に救急車を要請し医療施設に搬送された。救急隊接触時（午後8時15分）、バイタルサインは心拍数 114回/分、呼吸数 24回/分、血圧 106/64 mmHg、SpO2 97%（室内気）、体温 36.2℃、JCS0であったが、搬送中に本児は入眠した。テーブルの近くには椅子（高さ約40cm）があり、本児が椅子に上ってダイニングテーブルの上にある投薬瓶に手が届く状況であった。</p>

<p>治療経過と予後</p>	<p>午後 8 時 37 分、医療施設到着時に本児は覚醒しており、バイタルサインは心拍数 116 回/分、呼吸数 30 回/分、血圧 94/44 mmHg、SpO₂ 99%(室内気)、体温 36.7℃、意識清明であった。午後 8 時 53 分に診察開始、午後 9 時 28 分に診察中に嘔吐を認めた。その後徐々に傾眠傾向となり、GCS(グラスゴーコーマスケール)で 8 点の意識障害を認めたが、気道・呼吸・循環は保たれていた。静脈路を確保し観察室で経過観察を行ったが意識障害は改善せず、午後 10 時 35 分に左鼻腔から胃管を挿入して活性炭 1g/kg を投与し、呼吸・意識レベルの観察目的に入院となった。入院後、明らかな発熱や頻脈、下痢、尿閉、興奮などはなく、呼吸循環は保たれていたが意識障害は持続した。</p> <p>入院 2 日目の午前 7 時に覚醒し、ふらつきはなく、経口摂取や排尿・排便に問題はなかった。入院 3 日目に母に対して事故防止支援サイト(https://www.niph.go.jp/soshiki/shogai/jikoboshi/)の指導用パンフレットを用いて事故予防指導を行った。新たな症状は出現せず、入院 4 日目に無症状であったため退院した。</p>
----------------	--



図 1: 計量カップ付きノズル式投薬瓶の実物。目盛りのついた計量カップが投薬瓶のキャップを兼ねている。計量カップの中心部分には突起があり、突起とノズルの先端を合わせてねじ込む構造となっている。

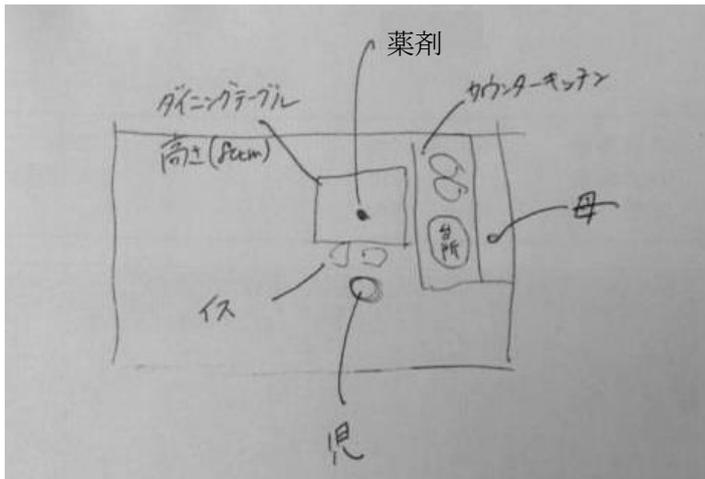


図 2: 誤飲発生時の部屋の間取りと母と本児の位置関係 (母が描画)。